

はまた楽天性の思想的根拠となっている。そして、儒家の貧樂思想もこの楽天性の形成に深くかかわっている。吳主恵によれば、中国人は、生きるために生きるのであって、もし生きるなら、あるいは生かされるなら、どこまでも生きて行く、すなわち徹底的に生き抜くということであり、そこに楽天性の中から粘り強い性格と簡単にあきらめてしまう性格の二律背反的な人間性を見出すことができよう。<sup>17</sup>しかし、この簡単にあきらめてしまうという性格には、生への執着を簡単に捨て去るといったものではなく、やはり生への期待や希望を持ちながら、粘り強く生きていくという精神が背景に存在している。中国人は、生存するために社会に順応し忍耐しつつ、如何なる困難な境地に置かれても、常に生への執着を抱きつつ、希望を持ちつづける国民であると言いうことができよう。

ここで、いま一つ諺を取り上げてみる。それは、

苍天不负有心人 (天は意志のある人にそむかぬ)

であるが、「あきらめずに粘り強く努力すれば、いい結果が得られる」ということを、“苍天”に託しているところから中国人の“天”に対する考え方がこの諺から窺える。ここに現われる“天”は、自然現象としての“天”を指すのではなく、人の運命の主宰者としての“天”である。古代中国の人々にとっては、一般に人々の居住する大地に対して、頭上高く万物を覆っている“天”は、万物を創造し主宰する神秘的な存在、あるいは人間が死んだ後、その靈魂が上昇して宿るところなのである。すなわち、中国の古代の人々には、天は万物の主宰者であり、人の運命の主宰者であると信じられていた。これがいわゆる「天命観」であり、古くから経書により伝承されてきている。<sup>18</sup>例えば、孔子は“不怨天、不怨人、下学而上达者、知我者其天乎”と説き、《論語》にも“五十而知天命”というような説教が見えるが、「中国人の意識すると否とにかかわらず、その精神生活を原則的に支配する。中国人は天の下で生活することを意識し……『天は自分たちの運命の主宰者である』ことを信じ」<sup>19</sup>ており、そして中国人は、禍福は天の定めたものであると信じている。“天命”とは、神秘的な存在として信じられるようになった“天”が、万物を主宰するために万物に命じた絶対的な命令としての“命”である。後に“命”という言葉も使われるようになったが、この言葉は明らかに“天の命”に由来したものである。すなわち、中国人は天命を尊ぶという特性を持っているのである。天を尊敬するがゆえに、天よ

り与えられたと思われ運命を素直に受け止め、禍であらうと、福であらうと、すべて天の意志であると信じている。このような、世の中の出来事と自然界に発生した災難や禍福とを因果関係で結び付ける考え方は、儒家の“天人合一”に由来する。このような考え方は諺にも反映されており、上にあげたものほかに、“天”や“命運”、“禍福”に関する諺が数多く存在している。例えば、

各人头上一个天 (一人一人の頭上にそれぞれ一つの天)

听天由命 (天に運命を任せる)

天无绝人之路 (天には人を絶する路がない)

塞翁失马,焉知非福 (塞翁馬を失う、安んぞ福に非るを知らん)

などがそれである。これらの中には、古くから伝えられてきた封建的な教えや迷信などが含まれていることは言うまでもない。これらの諺を見ると、中国人は確かに運命というものを信じ、自分の命も天命に委ねるが、同時にまた自身自身の努力によって、運命は変えることができるものとも信じ、どれほど苦しい環境と困難が差し迫ろうとも、それを克服しながら、余裕を持って生きていくのである。

なお、日本には、「塞翁馬を失う、安んぞ福に非るを知らん」という諺も存在しているが、それは明らかに中国から伝来したものであり、日本独自の諺ではない。

### 3. おわりに

中国の諺は数多く存在しているが、その中に集団の論理に関するものは少なく、多くは個人の修養や教訓を説いたものである。本稿で挙例した“行要好伴、居要好邻”、“与人方便,自己方便”、“忍一日之气,免百日之忧”、“小不忍则乱大谋”、“不受吾中苦,难为人上人”、“知足者常乐”、“天无绝人之路”などはいずれもそうである。ここでもうひとつの例をあげてみよう。

時事造英雄 (時世は英雄を造る)

既に述べたように、中国では歴史上多くの王朝の栄枯盛衰が見られ、それが中国人の精神的特性の形成に大きな影響を与えてきた。歴代王朝の栄枯盛衰に伴う社会の動乱の中で生存していくために、中国人は忍従性を有するには有するが、同時に有力でかつ正義のある英雄に苦しい生活から救われたいとの願望